武蔵野日曜聖書講筵

ヤボクの渡

――創世記第32章2～32節――

（「活けるキリスト」150号 １９７８年8月号より転載）

１９７７年5月15日
小池辰雄

はしがき　此岸と彼岸　イスラエル　ペニエル　唯一人　対水の陣　神の戦士　ヤコブとパウロ

【創世記32】

22その夜おきいでて二人の妻と二人の仕女および十一人の子を導いてヤボクの渡をわたれり。23即ち彼等をみちびいて川を渉らしめ、又その持ち物を渡せり。24而してヤコブ一人遺りしが25其人己のヤコブに勝たざるを見てヤコブの髀の枢骨に触れしかば、ヤコブの髀の枢骨其人と角力する時挫離れたり。26其人夜明けんとすれば我をさらしめよといいけれども、ヤコブいう、汝われを祝せずばさらしめずと。……28其人いいけるは、汝の名は重ねてヤコブととなうべからずイスラエルととなうべし、其は汝神と人とに力をあらそいて勝ちたればなりと。29ヤコブ問うて、請う汝の名を告げよといいけれども、其人何故にわが名をとうやといいて乃ち其処にて之を祝せり。30是を以てヤコブその処の名をペニエル（神の面）となづけて曰う、我面と面をあわせて神とあい見てわが生命なお存るなりと。31斯て彼日のいづる時にペニエルを過ぎたりしが其髀のために歩行はかどらざりき。32是故にイスラエルの子孫は今日にいたるまでも髀の枢の巨筋を食わず。是れ、彼人がヤコブの髀の巨筋に触れたるによりてなり。

●はしがき

ヤコブは父イサクの命によって、カナンの女から妻を娶ることをすまじく、ベエルシバから旅立ち、ハランの方に向かいました。その途上での石枕で示された「天の梯」のことは前回に語りましたが、その後篇としてここに、帰途ヤボクの渡で起こった劇的な恵みを学びたいと思います。

ヤコブは心身の剛健なまた熾烈な情熱の人であったと思われます。そのことは創世記第29章から展開しているラバンのもとにおける十数年の生活を見てもわかります。

即ち、彼は正妻としてラケルを嫁としましたが、姉のレアとの間にルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの六人の男子、レアの仕女(つかえめ)ジルバとの間にガド、アセルの二人の男子、ラケルの仕女ビルハとの間にダン、ナフタリの二人の男子、そしてついにラケルとの間にヨセフ。その後ベニヤミンが与えられましたが、四人の女性によって十二人の男子が与えられたわけです。即ちイスラエルの十二支派の基がそのようにして成ったという不思議な選びの器でありました。彼がヤボクの渡を渡るときはこれらの妻子を引きつれていたわけです。

●此岸と彼岸

ヤボクの渡(わたし)というのは、ヨルダン河を少し遡(さかのぼ)ってスコテの方向にいくとヤボク河という支流がヨルダン河の東側にある。そこの渡です。そんな大きな川ではない。

22その夜おきいでて二人の妻（即ちレアとラケル）と二人の仕女(つかえめ)（即ちジルバとビルハ、この四人の女性）および十一人の子（即ちラケルの直系の子であるベニヤミンはまだいないので、ベニヤミンを除いた他の十一人の子）を導いてヤボク（ヤッボーク）の渡をわたれり。

ヤボクの渡をなぜ夜陰に乗じて渡るようにしたかというと、へたをするとエサウがやって来るかも知れないから、今のうちに渡っておけというわけでしょう。慎重なはからいです。ヤボクの渡というのは大体、死海の北の方40キロ位のところです。

23即ち彼等をみちびいて川を渉(わた)らしめ、又その持ち物を渡せり。

こうして全部、対岸に渡らせました。

24而してヤコブ一人遺(のこ)りしが

という。これは注目しなければなりません。ヤコブは真っ先に渡ったかと思ったらそうじゃない。しんがりで、しかも渡らなかったんです。

人ありて夜の明るまで之と角力(すもう)とる。

この「角力をとる」とか、「しがみつく」とかいうヘブライ語は「ヤァベーク」という言葉で、「ヤボク」と「ヤァベーク」とは語呂が通ずるのでおもしろい。ヘブライ語は非常に音の似たのが多いですから。

「一人の人がこれと角力をとった」

「一人の人」というのは「イーシュ」（ある男）と書いてある。

25其(その)人己のヤコブに勝たざるを見て

なかなか大変な角力だよ。日本の角力みたいに簡単じゃない。

ヤコブの髀(もも)の枢(つがい)骨に触れしかば、ヤコブの髀の枢骨其人と角力(ちからくらべ)する時挫(はず)離れたり。

霊的な力がはたらいたわけです。腰骨がはずれてしまった。

26**其人夜明けんとすれば我をさらしめよといいければ、ヤコブいう、汝われを祝せずばさらしめずと。**

ヤコブはやっつけられた。そうしたら、やっぱりヤコブらしい。

「汝われを祝せずばさらしめず」

と、しがみついたわけだ。

「私を祝さなければあんたを去らせるわけにはいかない、あんたを去らせない」

と。負けても負けないんです。

27**是に於て其人かれにいう、汝の名は何なるや、彼いうヤコブなり。**

「ヤーコーブ」（おしのくる者）だと。

●イスラエル

28**其人いいけるは、汝の名は重ねてヤコブととなうべからずイスラエルととなうべし、其は汝神と人とに力をあらそいて勝ちたればなりと。**

「イスラエル」という名前がはじめてここに出て来た。今、イスラエル民族というけれども、これは歴史的な事件なんです。

「イスラエル」という言葉は、「神戦い給う」が原義ですが、「神勝ち給う」でもある。或いは全然反対に、執拗に「神と争う」と解釈する人もいます。大体この「イスラーエール」の「イスラー」の動詞は「サーラー」という字ですが、「サーラー」と動詞で使っているのは、旧約聖書に実に創世記の32章9節とホセア書12章4節しかない。

「かれは天の使と角力あらそいて勝ちなきをもって之に恩をもとめたり」

の「角力あらそい」という言葉が「サーラー」という言葉です。

「神は勝ち給う者」

「神としつこく争う者」

どっちにとっても「イスラエル」という言葉はおもしろい。またどっちの意味もあると言って差支えない。更には、

「神の戦士」

といった意味に転じても可いでしょう。

●ペニエル

29**ヤコブ問うて、請う汝の名を告げよといいければ、其人何故にわが名をとうやといいて乃ち其処にて之を祝せり。是を以てヤコブその処の名をペニエル（神の面）となづけて曰う、我面と面をあわせて神とあい見てわが生命なお存るなりと。**

神様の顔を見ると、大体こちら側はおそろしくて死んでしまうという観念があった。た

とえば出エジプト記33章。会ったけれども自分は生きていると、モーゼがそうだった。モーゼも、「神と面を合わせたる者」という。これは大変なめぐみでした。見神の現実！　神の自現に遭ったヤコブは決定的な確信を得ました。

31斯て彼日のいづる時にペニエルを過ぎたりしが其髀のために歩行はかどらざりき。

枢骨をはずされたから無理もないことです。

32是故にイスラエルの子孫は今日にいたるまでも髀の枢の巨筋を食わず。是れ、彼人がヤコブの髀の巨筋に触れたるによりてなり。

まことにドラマーティシュな事ですが、我々はここで何を見なければならないか。

●唯一人

ヤコブは一人、河の此岸に残っていた。彼は残って何をしていたか。祈ったに相違ない。そうしたらば神の使者がそこに現われた。我々も勿論多勢で祈ることは大事ですけれども、一人の祈りこそ大切です。預言者というのはみな一人の祈りの人です。いわゆる「預言者の群」といわれる預言者たちはこれとちがいます。神の召命をある日突如受ける預言者が本ものです。エリヤ、エリシヤ、アモス、ホセア、ミカ、エレミヤ、イザヤ、エゼキエル等はみんな本当に一人で深く祈った人たちです。

今の日本の民主主義が醸しだしている風潮は、勝手気ままな個人主義とその集団といった性格が大方ではないですか。やれ団交だ、やれストライキだといった風潮でしょう。しかも暴力的行為を以て法を破ることがあたりまえの如くなっている。傍若無神の民主主義は禍なる哉！　これに反し、真の民主は、神との関係を根底にもった個人が土台。そこに責任と自由がある。そういう個人の人格共同体としての社会に本当の民主主義があるはず。そういう個人のよき例は聖書の預言者的人物と使徒的人物です。ヤコブはそういう預言者的人物でした。

そういう神との一対一の関係、それはモーセの「十言」〔十誡〕にはっきりでています。十言の第一言は、

「汝イスラエルにとってはわが顔の前には他の神々はあるまじきものぞ」

という聖言です。いろんな民族の、いろいろな神々を認めている。けれども、

「わたしの顔の前にはそれは無きに等しい」

と。ということは、エホバの神はイスラエルの民、及びそのひとりびとりに対しては、

「一対一の関係である」

ということ。一対二以上の多数の関係じゃない。民族として一つ、その個人として一つ、即ち一対一の関係。この一対一の関係が人格神ということです。人間相互の関係も一対一が人格関係で、他との比較をしたら、それはもはや人格関係ではなくなる。万人、顔を異

にし、万人指紋すら異にしています。これが神の芸術品たる人格的存在たる人間です。

●対水の陣

ヤコブが一人立った時に、そこに現われた一は何かと言うと、神的存在、神の使者でありました。即ち神的一者との関係が一対一でした。そういう神の使者と角力を取った、いわば神と取っ組みをしたということです。

キリストも神様と取っ組んだんですよ。イエスも神様を相手にした。神様を相手にしない人は結局本当の世界に来れない。けれども、私たちは神を直接相手にすると、これはどうにもならん。そこでキリストが媒介者として立つに至ったのは後の話ですけれども。

要するに旧約の世界に於ては、神の使者がやって来て、これと一対一の関係で取っ組んだ。夜もすがら取っ組んだ。妻子たちは皆彼岸に渡して安全にしておいて、自分一人此岸で、対水の陣を布いて生命賭けの取っくみをやった。

モーセが出エジプトをした時には、眼前には紅海がある。後にはエジプトの強力な軍勢が追い迫って来た。彼も正に対水の陣を布いて、

「神様のこれからすることを見ろ」

と言って、神を信じて祈った。そうしたら、えらい事が起きたでしょ。

ヤコブも、内容はちがいますが、同じ態勢に立っているわけです。先ず妻子たちを救ってから、自分は最後だというわけだ。私も、天国に往く時は、天の門が最後に閉ずる瞬間に入れて戴ければ結構です。出来るだけ多くの人たちを天国に助け入れてから、というのが私の悲願です。

そういうわけで、背水の陣ではなく、対水の陣を布いて彼は祈っていたら、見知らぬ人がやって来て、一対一の角力が始まった。相手が誰だかわからなかった。始めは勿論、人間だと思っていたのでしょう。ところがなかなか強い。ヤコブはたしかに豪傑はだの男だったにちがいないが勝てない。ヤコブは「押しのくる者」といわれるくらい、激しく求める者で屈しない。そこで神の使者は霊知を思いあたり、霊的な力を発揮して、角力で一番大事な髀の枢骨に手をあてた。するとヤコブの腰骨が外れた。さすがのヤコブもこれには参ってしまった。肉体の力がくずれたが、たましいの力は逆に旺んになった。そこでヤコブは何と叫んだか。

「わたしを祝福してください。でなければ去らしめません」

と言って両手でしがみついた。

「天国は激しく攻むる者これを奪う」

という。

「力を尽し、精神を尽し、思いを尽して主たる神を愛せよ」

というのも、

「神様にしがみつけ」
ということだ！

「求めよ、さらば与えられん。たずねよ、さらば見い出さん。門を叩け、さらば開かれん」

これもみな体当り的追求です。ただぼやっとしていて、本当の世界に入れっこない。捨身の態勢でもって突破突入してゆく。相手は神的存在だから、こちらは一ぺんやっつけられる。これが大事なんです。

もう一人、ヤコブみたいな人間がいましたね、パウロですよ！　彼は、

「キリストはけしからん。ユダヤ教に反するけしからん新興宗教が現われた。それを信ずる奴らもけしからん」

と。みんなこれを牢屋に叩き込む役割を演じつつあった。いきり立って大祭司の添文を貰ってダマスコまで出かけて行ったでしょ。ところが、そのダマスコ途上で復活のキリストが現われて、

「サウロ、サウロなんぞ我を迫害するか！」

「お前の熱心はいいけれど、お前の熱心の内容が大間違いだ」

と、パウロはひっくり返されてしまった。パウロはアナニヤに按手されて、

「わが目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と告白して、回心して、キリストの僕となった。ヤコブもまた髀の枢骨をはずされて降参しながらも、その下からしがみついた。それで祝福を受けた。エレミヤも、

「汝我をとらえて我に勝ち給えり」（エレミヤ20・7）

と言っていますが、エレミヤも神にねじふせられた。神にやっつけられることは、本当の力をたまわることになるのです。だから、

「福音書は、特にキリストが主人公であるドラマですから、キリストと取っ組んで、『参りました！』と言って降参しなければ、福音書の世界に入れない。『あなたは大変な次元の方で私の敵でも何でもありません。参りました！』と言ってキリストに降参すると、その世界に入れられる。福音書を読んで、分るの分からないのと、そんなことじゃないぞ」

と、私がはっきり言っているでしょ。

●神の戦士

ヤコブはやっつけられて、はじめて「イスラエル」「神勝ち給う」という名を賜った。「神勝ち給う」から、今度は「神の戦士」とか「神の勝者」とかいう意味が出てくるわけです。神に打ち勝たれたる者、それが本当の神の戦士となる。さきほども言いましたように、エレミヤは神に打ち勝たれたら、いよいよ、

「神の言が私の中で燃える火の如くひびき、黙そうとしても黙すことができない」といって預言をつづけました。これが即ちこの信仰の世界の極めて大事なことです。自力ではない。自力に死んで、降参して、

「自分は何者でもない」

と本当にさとる。そこに無者の秘訣があるのです。

「私は何者でもありません、ただあなただけです」

と言って、自分を汝の中に投身する。そういう一如の境地が、即ち無者が即無限無量者という一如なのです。ヤコブが神に打ち勝たれて戦士とされた。これは「イスラエル」というただ名前を賜わったのではない。事実を、現実を賜わった。その告白、その証言が「イスラエル」という名前にこもっている。

我々に於きましてはどういう事になるか。罪びとだから何をやっても人間のやることはみんな落ちていく。上から来るところの聖霊の力が火花すると、落ちるはずの人間が今度はグーッと上昇して往く。

●ヤコブとパウロ

「罪」というのは、申し上げている通り、「自我」です。これは誰でも持っている。ヤコブは自己主張式なところがありました。一ぺんヤコブは死んでイスラエルにならなくては本当の展開はない。しかし自分で死ねない。十字架のキリストと共に殺されなければならない。即ち、無我者は質的に即無限無量者とされている。

「南無阿弥陀仏」の南無、

「南無キリスト」

の南無は「祈入」する意味に私はとっています。そういうものを賜わって、それで自分が本当に活動しなかったら、それは恵みをいたずらにしているのであり、

「愛にはたらかない信仰は空しい」

とは、聖書が語っている通りです。これは理論ではなく、信仰そのものが語る事実です。まことの信は内的行為であり、それは「呼吸」の吸の如く、呼に、外的行為に現象せざるを得ない。その外的行為がどんなにみじめなものであろうと、聖霊の力をもったまことの信は必ずや愛の行為に現ずる。神様は無限にキリストを通して力を与えてくださるから、我々は動かざるを得ません。

そういうことですから、求めてやまないヤコブは、ヤボクの渡しの角力のドラマを通して神の戦士イスラエルと変貌しました。私たちキリストのみ霊にあずかっているキリスト者は本当のイスラエル人であるのです。キリスト者はいつかヤボクの渡の此岸でそういう命賭けの取っ組みをして、みたまのバプテスマにあずかり、彼岸人、イスラエルとされねば、まことのキリスト者でないことは、パウロがロマ書8章で明言している通りです。神様は

そのような一人一人を求め給う。キリストの本当の弟子はステパノ、ピリポ、ペテロ、ヤコブ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ等、聖霊の人たちでした。その命賭けの働きによって新約聖書という本の土台が成りました。一番最たる者はパウロに相違ない。ヤコブとパウロは性格的に似た人物でした。ある意味で一番神様を手こずらせる人間でした。そういう人物たるヤコブは天の使に取っつかまり、パウロはキリストにやっつけられた。それでヤコブもパウロも撰(えら)びの器となり、信仰の歴史上、不可欠の役割を果たしました。

器の大小はともあれ、私たちもそういう本ものでありたい。人の目にどう見られようとそんな事を問題とせず、キリストの証人としてどこまでも進んでゆきたいものです。

おわりに、「夜更けの川辺に」という聖歌558番をかかげます。

1夜更けの川辺に友らと別れて
　ただ独りものを思いおりしとき、
　この身にいどみて組みうちはじめし
　目に見えぬ人よ、名をあかし給え。
2いかなるお方ぞこの身の悩みと
　罪とがことごと見抜きたまいしか
　この身は知らねど祝したまわずば
　なれをば去らせじ夜明けとなるとも
3君はわがために身がわりとなりて
　あまたのなやみを受けさせ給いし
　お方にあらずや、祝したまえ、
　今よしこの腰骨砕かせ給うとも。
4腰はたたずともこの手はゆるめじ。
　汝が恵みなくば生くるかいもなし。
　死力をつくして取り組むこの身を、
　いざ祝し給え、明け方来(こ)ぬ間(ま)に。
5闇夜は明けゆき晨(あした)は来(きた)れり。
　古きは過ぎ去り新しくなれり。
　砕かれつくして明けわたしし今、
　罪の力にもこの身は勝つを得ん。
6小鹿の如くにあしなえも躍り、
　神のみ力を讃めたたえまつる。
　世にあるかぎりは「ペニエル」証しせん、
　げに「心清き者は神を見る」と。